

共に創る図書館

～館長対談シリーズ⑤～

荒木教養教育院長との対談

吉本 本日は教養教育院長の荒木先生から、お話をお伺いします。よろしくお願いします。

荒木先生のご出身と徳島大学に赴任された頃の教養部等の様子をお聞かせ願えますか。

荒木 横浜の山と川に囲まれた環境で育ち、大学は東京教育大学の修士課程最後の学年でしたので、その後設立された筑波大学の博士課程へ進みました。修了後に、徳島大学の教養部へ講師として赴任しました。

徳島大学の教養部は、昭和40年に学芸学部が教育学部に改組されると同時に設置され、平成5年3月に廃止されました。その後平成11年に全学共通教育センターが設置されるまでの間は、大学教育委員会の中の全学教育の専門委員会が全学共通教育を進めてきましたが、15年のセンターの時代を経て、今年4月から新たに教養教育院がスタートしたわけです。教養教育院を立ち上げるにあたって教員の異動希望を確認しましたところ、希望者はほぼ全員、元教養部出身の教員でしたね。

吉本 図書館に関する思い出はございますか。

荒木 私の図書館に対する好感度が高まったのは、筑波大学の博士課程の頃でした。当時、筑波大学の図書館は、夜10時まで自由に使える非常に便利でした。また筑波大学として発足した当時は、東京教育大学から移管した資料に医療系は少なかったのですが、Psychological Abstractsなどの二次資料がよく整備されていたので、文献取寄せに関しては非常に効率よく行われていました。

また、開学間もない頃の筑波大学では新しい資料は順次揃ってきましたが、古い医療系の文献などがありませんので、自分で他大学へ行って入手することが必要でした。当時は、東京大学と慶応大学の図書館が非常にオープンだったので、筑波大学の図書館で作成していただいた紹介状を持っていくと、その学生とほぼ同じ条件で利用させていただけました。また、ある時は、文献コピーに手持ちのお金を使い果たし、交番で帰りの電車代を借りたこともありました。その頃の図書館は何か知的好奇心を湧き出す雰囲気がありましたし、学業に熱心に取り組む学生も多く、女子学生は髪も気にせず勉学に励んでいましたし、また図書館では歩く靴の音さえも気にする雰囲気だったのをよく覚えています。

図書館にはたくさんの書籍が並んでいましたので、その中に見たことのないような名前や未知の分野を発見すると、こういうのも研究になるんだな、と感じたものでした。また、そういう経験は、意外と将来の自分の研究テーマを持つ時のモチベーションにもつながったりしました。資料を集めるというのは文献を集めるだけでなく、学び喜びという原点に立ち戻るといったことなのだと感じましたね。

どんなに問題があっても何か手立てがあるはず

吉本 荒木先生の研究分野はコーディネーション理論ですが、どのようなきっかけがあったのでしょうか。

荒木 私は、小学校3年生までは驚異的に運動能力が低く、成績も通知表を見て親が泣くものでしたが、小学校



4年生から突然数学の授業が分かるようになり、その頃から足も速くなり、それを境に勉強のことやスポーツのことが大きく転換したという経験があります。原因は今でも分かりませんが、この経験は私の人生観に大きな影響を与えており、学生がどんなに問題があっても必ず何か手立てがあるはずだと考えるようになったのに関係しているなと思います。

私自身は子供の頃学校で天文部を立ち上げており、そのような理系方面へ行きたいという希望と、陸上競技で頑張りたいという二つの希望がありました。ある時、雑誌に掲載されていた陸上競技の運動生理に関する記事を目にして、私の中の二つの希望の路線がくっつきました。このことを父親に相談すると、東京教育大学に運動生理学で有名な杉靖三郎先生がいらっしゃるの、そちらを目指すという良いということを知り、将来の進路として目指したわけです。杉先生は、私が入学してまもなく定年退官されショックを受けましたが、当時の運動生理学の研究室では、運動生理学は、どういう条件を与えたときどういう反応をするかというダイナミズムを研究するものだという考えに基づいていました。

このことには感銘を受けました。大学2年の時に、身心相関論という田中英彦教授の講義を聞いて、心と体の関連性の問題を知ったのがきっかけで、私がやりたいのは、脳だ、巧みさだということに気が付き、私の中で統合という概念、今でいうシナジーとかコーディネーションという概念が芽生え、方向性が変わりました。しかし残念ながら当時はこの概念に関する文献はロシア語のものがほとんどで、手に入れるのも難しかったという状況でした。しかたなく国会図書館などへ行って文献を入手していました。私はロシア語の知識もありませんでしたが、興味があったので、なんとか独学でロシア語の勉強をしましたが、その時に、ロシア人の発想はこういう風になるんだと、理系であっても思想的なものを深める大切さということを学べたと思います。



教養教育院長 荒木秀夫
平成28年から徳島大学副理事

吉本 徳島大学へ赴任されてからの図書館の思い出はありますか。

荒木 やはり蔵本分館ですね。筑波大学時代は生理学分野の古い文献が当時は少なかったため、近隣の東京大学や慶応大学で文献を入手していましたが、徳島大学へ来てからは、蔵本分館へ行くと、多領域の文献が、結構揃っていましたので、そこで文献コピーを入手してました。これによって必然的に、異なる分野の教員同士が会話することもありましたし、そういう意味で図書館は拠点になっていたと思います。

学生がお互いにディスカッションの様子を見てモチベーションが上がる

吉本 教養教育に関する図書館との連携の可能性についてお伺いしたいと思います。図書館ではスタディサポートスペースという学習支援室があり、教養教育院の先生にも学生からお願いして入っていただいています。教養教育院にも学習相談室がありますが、2つの関連についてはどのようにお考えでしょうか。

荒木 教養教育の建物を改修してから、相乗効果といいますか、学生のある種のたまり場のようになっていますが、そこで予習復習をしている学生も何人かいます。これが何か力所もありますと、お互いに学習している様子や、何かディスカッションしている様子がなんとなく見えて、学生の中で何か学ぶとか、何か目標を立てるといったモチベーションが上がるという効果があるようです。非常に良い環境だと思えます。大学の中において、それぞれの学部の領域とか他領域・他分野にまたがる総合的な課題が関係するというのは、教養教育院と図書館になりますよね。教養教育院でできないことは図書館でやるし、図書館でできないことは教養教育院でやる、そのベクトルの一致するところがかみ合うと、1+1以上のものができるのではないかと思います。



附属図書館長 吉本 勝彦

読み書きのところで一番弱くなっているのは「感性」の問題

吉本 図書館と教養教育院のコラボのような形でライティングセンターのようなものができないかと相談したことがあります。全学共通教育センター時代の平成 25 年度に大学入門講座の中で読書レポートを始められましたが、これは学内の多くの教員からの「最近の学生の書く力が弱い」という意見に対応しようとしたものでした。学生にアカデミック・ライティングを指導するにあたって、実際に指導する立場の大学院生の育成をどのようにすべきかという課題を解決していく必要があります。この点を含めて、教養教育及び専門教育を通じて「読む力、書く力、プレゼンテーション力、論理的思考力」などの汎用的技能の向上が、学生に求められていますので、図書館でどのようにサポートできるのか検討したいと思っています。

荒木 読み書きのところで一番弱くなっているのは感性の問題ではないかと思います。人間は顔の認知などにおいて老化が速く進みますが、一方で、生涯にわたって学ぶチャンスもあれば、臨界期もあると思います。文章に限らず音楽の部分でも、歴史的に伝承された文化というものは全ての人間に対して感じ入るものがあるでしょうね。こういうものを人と交えて語り合うというのも重要なアカデミックスキルだと思います。

企業担当者にお伺いしたことがあります。企業のグローバル化で何が役立つかという、実は英語が堪能でというのが一番役に立たず、逆になんでも pardon? と聞き返すような人でも、とにかくロジカルに何かを考えて伝えることができる人材が役に立つというお話がありました。このように異文化を理解する力や多様なロジックというのが非常に大切だと思いましたので、それで今回の大学の改革においてはグローバル化教育と外国語教育を明確に分けるべきだと思いました。

手段によってはアクティブを消してしまう可能性がある

吉本 感性教育というのは普通の授業ではなかなか難しいと思いますが。

荒木 私の授業の中では、まず討論し、次に討論について討論します。これは自己の振り返りとして気付きにつながります。今の学生の中には、指示待ち症候群がありますが、以前、高校時代にアクティブ・ラーニングを経験したという学生がいたのでその様子をよく聞くと、実は active ではなく passive だったということがあり、考えさせられました。

2020 年からは全国の小学校でアクティブ・ラーニングが導入される予定ですが、アクティブ・ラーニングというのは、型に入ってしまうと、アクティブを消してしまう可能性があります。大学でも講義ごとの個性的なものというのを考えるというのが大事だと思います。



吉本 以前実施されていた共創型学習は、そういう意味では良かったのではないのでしょうか。

荒木 参画型ですね。たとえ劣っている学生がいたとしても二人で議論すると何か出てくると思いますので、教員がこういうふうにアクティブにきなさいと指示するのではなく、あくまでも感性から始まる主体性という部分が大切だと思います。

吉本 学生の能動的行動をどのように引き出すか、ということが大切ですね。

荒木 アクティブには二つの問題があり、個人としてのアクティビティと集団としてのアクティビティとがあると思います。元々ネアンデルタール人と違ってホモサピエンスは、コミュニケーションを取り、群れるという習性があるわけで、本来の人間の姿であると思いますね。

吉本 次に ICT 環境についてどのようにお考えでしょうか。

荒木 一般的に ICT の便利さは実感されていると思いますが、ICT の持つ危険さというのはあまり認知されていないように思います。人間が TV やパソコンなどの光源を見るようになったのは、700 万年の人類の進

化の中でごく最近のことですので、サイバー系の犯罪とかもありますが、パソコンなどのバーチャルな映像が脳に与える影響というのは、あまり危機感が持たれていないのが実情です。ICTにおいてもゲームソフトを開発した人は経済効果があるかとかは考えますが、果たして人類にどのように影響するかということ予測できるものではありませんし、コンピュータができた時も同じで、誰もその影響は分かっていません。ICTによる影響として今後、バーチャルが基本になって、現実がこれに似ていると感じるようになり、色々な問題が起こることが予想されます。

ICTの発達にしたがって私たち人間の心や体の集団・社会・コミュニケーションというものに危険性があるのではないかと考える必要があります。私たちは会話をする時に、実は相手の声の反響を通じて意を汲み、場を読むということを意識せずに行っており、非常に重要な役割を果たしています。人々がメールなどに使う時間より、それを上回る時間を face to face で会話するということが大切ですよね。

吉本 確かに今はメールを交わすことが多くなり、対話が少なくなりましたね。

荒木 今の学生は、授業評価等を書かせた際に、紙媒体ではあまり意見を書かなくても、ウェブ入力となると意見を多く書き込むという傾向があります。

グローバル化教育とは異文化を理解すること

吉本 教養教育院では語学教育センターを設置しましたが、教養教育に係る役割というのはどのようなものでしょうか。

荒木 グローバル化教育においては、海外で数日間過ごして、文化を理解するということが大切です。今年から新しい建物となった国際交流センターでは、あるテーマについて対話しなさいというのではなく、取っ掛かりの部分だけを与えて会話するという設計をしています。これによって対話だけでなく、留学生等のしぐさなどからも文化を感じ取るということができるようではないかと考えています。

そういう意味でも、グローバル化教育においても、多領域に串を指すような役割を持っているのは、やはり教養教育院と図書館ということになります。そこに歩み寄りながら何か新しいことが協働でできるのではないかと思います。

学生のアカデミックなモチベーションに影響を与えることもある

吉本 図書館職員や、大学職員全体に期待することはどのようなことがありますか。

荒木 実は私のゼミ生のうちサポート系サークルに入っている学生が結構いますが、その中には、将来の夢は大学の職員、学務系の職員と言っている学生が複数います。その学生達から、学務系の方々に大変お世話になったのと同時に学業における大きな刺激を受けたといったことを聞きました。

また、図書館職員に対しても、学生の職員に対する信頼感というのは大きいと思います。非常に親切に書庫の中まで案内してくれたりしますし、そういう意味では教員目線というより、学生目線で身近な存在だと思います。

大学の職員の方の振る舞いで、学生のアカデミックなモチベーションに影響を与えることも大きいと思います。学生を介さない教職協働というのではないと思いますので、教職協働という意味でも、学生を介して母親・父親のような気持ちで対応していただきたいと思っています。

吉本 ぜひそういう点を念頭に置いて、協力体制に取り組みたいと思います。本日はありがとうございました。

